



Title	西欧政治思想史・前編(1)
Author(s)	清末, 尊大
Citation	北海道教育大学紀要. 人文科学・社会科学編, 56(2): 87-102
Issue Date	2006-02
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/815">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/815</a>
Rights	

## 西欧政治思想史・前編（1）

清 末 尊 大

北海道教育大学旭川校政治学研究室

### History of Political Thought in Europe, Part 1(1)

KIYOSUE Takao

Department of Politics, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education

序 政治学・政治思想史とは

第1章 ポリスの政治思想—プラトンとアリストテレス—

第2章 キリスト教の政治思想—アウグスティヌスとアキノサ—

第3章 近代国家の政治思想—マキアヴェッリとボダン—

参考文献

#### 序 政治学・政治思想史とは

政治学の語源は古代ギリシアのポリスにあり、政治学は古代ギリシアでポリスに関する学として生まれた。ポリスとは都市国家のことで、国家の一形態である。国家とは社会が発達し、利害の対立・争いが起こると、秩序を保つために権力・支配・統治が必要となり、統治機構が生まれ、政治社会が生まれるわけで、これを一般に国家と呼んでいる。政治学はこうした国家や政治社会に関する学問として古代ギリシアで生まれ、プラトンとアリストテレスによって体系的に論じられた。

プラトンとアリストテレスはアテナイとギリシア都市国家の内部に視野を限定し、寡頭派と民主派の激しい内部抗争にさらされたアテナイとギリシア都市国家において、理想国家や最善政体は何であり、どうすれば実現できるかを論じた。こ

こでは、政治学と倫理学は同じ学問体系に属している。アリストテレスは更に学生を率いて158ものギリシア都市国家の国制実態調査を行い、現代政治学に似た関心ももっていた。

プラトンとアリストテレスは、奇妙なことに、ポリスの対外関係、国際政治は政治学の対象とは考えなかった。東にはペルシア帝国、北にはマケドニア王国というポリスとは異質な強大な専制統一国家があり、アテナイとギリシア都市国家の運命は国内問題よりむしろ国際問題にかかっていたが、彼らは無視した。彼らもギリシア文明に対する脅威をひしひしと感じていたが、野蛮で時代遅れのアジア的専制支配と軽蔑し、学問の対象とは認めなかった。

政治学は今日、基本的に4つの専門分野の総称として使われている。4つの専門分野とは、1. 政治思想史、2. 政治史、3. 現代政治学、4.

国際政治学，である。1. 政治思想史は古代から現在までの政治思想・政治哲学を扱う。2. 政治史は政治を中心に扱う歴史学で，主に近代以降を扱い，社会史などが登場する以前は歴史学の主流であった。3. 一般に現代政治学と総称されている分野は主に統治全般を扱う。例えば，政府と議会，政党と利益集団，投票行動，政策と官僚制，こういったものを扱う。行政学もここに含まれる。4. 国際政治学は主に近代以降の国際政治全般を扱う。近代の主権国家を主体とする国際体制を確立したウェストファリア体制以降の国際関係を主に扱う。

政治学はこのように広大な学問体系であり，ここでは政治思想史の中心をなす西欧政治思想史の前編を扱う。

## 第1章 ポリスの政治思想—プラトンとアリストテレス—

### 1. 古代ギリシアのポリス

ヨーロッパ文化の主要な源泉の1つは古代ギリシアであり，これは政治学・政治思想史の分野でも同じで，プラトンとアリストテレスの壮大な体系を生み出した古代ギリシアのポリスに源泉をもっている。そこで，先ず，プラトンとアリストテレスが生活し，「ギリシアの学校」をもって任じ，ギリシア最高の文化を誇ったアテナイを中心に，ポリスの性格を見ておかなければならない。

古代ギリシアのポリスはアテナイ，スパルタを中心に，全盛期には1500余りにも達したが，ポリスの語源は城壁のことであり，城壁に囲まれ，神殿を中心にもつ都市が支配する人口・領土ともに小規模な都市国家であった。その住民は自由人と奴隷に分かれ，自由人は在留外国人と市民に分かれていた。アテナイはペルシア戦争後には，直径2kmほどの円形の城壁，それに港ピレウスまでの城壁に囲まれ，守護神アテナを祭るパルテノン神殿を中心にもち，周りのアッティカ平野を支配する都市国家であった。人口は30万人ほどで，自由人20万人，奴隷10万人で，市民は4，5万人ほど

であった。市民のすべてが市民権（これに土地所有権と参政権が伴う）をもつのではなく，女・子供には認められず，戦士になれる成年男子に限られていた。

古代ギリシアのポリスは戦争に備えた戦士共同体で，戦士だけが市民権をもつ市民共同体であり，共通の守護神を祭る宗教によって統合していた。ポリスは市民の自治・自足共同体であることによって，他国との同盟関係や貿易をひどく嫌うという性格ももっていた。ポリスは市民共同体であるという点で，ギリシアを取り巻くペルシア帝国やマケドニア王国といった人口・領土ともに大規模な専制統一国家とは決定的に異なっていた。ポリスの市民はここでは1人の王だけが自由で，他は臣民として奴隷状態におかれていると考え，人間として文明生活を送れるのはポリスだけで，専制統一国家などは野蛮な過去の遺物にすぎないとみなした。

ポリスの国制は一般に，ホメロスが描く王政から紀元前8世紀頃に貴族政に移り，そして紀元前7-6世紀頃に，寡頭派と民主派の激しい抗争のなかで，戦争に促されながら，貴族政から民主政へと展開していった。アテナイが民主派を代表し，スパルタが寡頭派を代表することになる。アテナイは紀元前6世紀末にクレイステネスによる重装歩兵民主政，つまり自前で重装歩兵になれる中流市民まで政治に参加できる民主政になり，そして紀元前5世紀初頭のペルシア戦争の勝利によって，軽装備の海軍が主体となり，ペリクレス（紀元前495頃-429年）による下層市民までの全市民の民主政になった。ペルシア戦争の勝利，それに続くアテナイを盟主とするデロス同盟によってギリシアの覇権を求め，帝国主義的膨張によって，アテナイはこのペリクレスによる民主政の時代に絶頂期を迎え，しばしばここに民主主義の理想が求められることになるので，その実態を見ておこう。

統治機関としては，先ず，全市民が出席する資格をもつ市民総会がある。これは年10回定期的に開かれ，ポリスに関する様々な問題が議論され，

決定されたが、ここに直接民主主義を見るのは神話である。実際の統治は市民総会の名において、500人評議会が行った。これは10の部族が選挙で選んだ50名からなり、1年の任期の10分の1ずつ担当し、再選はできなかった。統治機関としては更に、裁判所がある。これは100の住民区が選出し、籤で割り当てられた500名以上の裁判官と陪審員からなるが、現代の裁判所とは異なって、広範な権限をもっていた。訴えられた問題はすべて、市民総会や評議会の決定でもすべて扱い、人民の名において判決を下し、控訴はなかった。役人に対しては、候補者を審査し、任期満了時には監査を行った。更に、例外的統治機関として、10人の将軍職があった。これは全市民の直接選挙で選ばれ、再選も認められたので、裁判所の監査もみせず、最も独立した統治機関であった。

ペリクレスは将軍の資格で、市民総会を味方につけて、絶対的権力を握り、死ぬまで握り続けた。ペリクレスは代々の偉大な将軍にして、明確な政治理念（アテナイの栄光と民主政）を追求し、民衆を陶醉させる雄弁な政治家であり、かつ人格高潔の士として民衆に圧倒的な人気があった。対外的には、スパルタを盟主とするペロポネソス同盟に敵対して、アテナイを盟主とするデロス同盟によってギリシアの覇権を求め、帝国主義的膨張によってアテナイの栄光を追求した。対内的には、デロス同盟の莫大な金と海外膨張による支配・通商の金をアテナイの城壁、神殿、港湾、その他の建造物に惜しみなくつぎ込み、民衆に大盤振る舞いし、アテナイの栄光を追求した。ペリクレスによるアテナイ民主政の繁栄はペリクレスによる大衆操作の独裁的支配や帝国主義的対外膨張にも基づいていたのであり、民主政は独裁や帝国主義とも適合的な政体なのである。ペリクレスによる民主政はアテナイにデマゴグ（民衆煽動家）による大衆操作の衆愚政とスパルタとのペロポネソス戦争をもたらすことになる。

ペルシア戦争の勝利、それに続く帝国主義的膨張による繁栄と民主化のなかで、紀元前5世紀中頃に知的関心は自然哲学から政治哲学（政治、倫

理、雄弁術）に移っていった。若者の野心は政治指導者になることであり、そのためには明確な政治理念をもち、人々を説得する雄弁術を身につけねばならなかった。その要求に答えたのがソフィストと呼ばれる一群の教師であった。彼らの議論は紀元前6世紀以来発達していた自然哲学の影響を受けて、自然（*physis*）と慣習（*nomos*）という対立概念を基本枠組みとしていた。自然界は不断に流動・変化しているように見えるが、その底には永久不変のものがある。例えば、原子論では、自然界は無限に多様な様に見えるが、その底には原子という永久不変のものがあり、それが様々な仕方で結合して無限の多様性を生み出しているにすぎない。こうした考えが人間界にも適用され、人間界にも永久不変なもの、絶対的なもの（*physis*）があり、それ以外は人間が作り出した約束ごと（*nomos*）にすぎない、とされた。

アテナイの繁栄はペリクレスの死後、デマゴグによる民主派と寡頭派の激しい権力闘争とスパルタとのペロポネソス戦争の敗北（紀元前431-404年）によって危機にひんし、混乱期を迎えるが、混乱のなかでソフィストの運動はますます広がっていった。そのなかで体系的思想を展開してくるのがソクラテス（紀元前470頃-399年）である。ソクラテスは何も書き残さず、彼の思想がどういふものであったかはよく解っていないが、とにかく彼の信念は「徳は知なり」であった。徳は客観的に存在する（*physis*であって、*nomos*ではない）。従って、それは知識の問題であり、討論によって教えることも、定義することも可能である。かかる客観的な真偽の判定を数や世論に委ねるわけにはいかない。こうした主知主義、知的エリート主義から、ソクラテスは民主派の批判者であった。ソクラテスは民主派から神々の冒涇者にして若者の墮落者として訴えられ、死刑判決を受け、毒杯をあおって死んだ。こうしたソクラテスの教えを壮大な思想体系にするのがその弟子プラトンである。

## 2. プラトン（紀元前427頃—347年頃）

プラトンは紀元前427年頃に、アテナイの名門の家に生まれた。彼は青少年時代をペロポネソス戦争とソクラテスに学ぶことで送り、ペロポネソス戦争の敗北、それに続く寡頭派と民主派の激しい権力闘争のなかでのソクラテスの処刑という2つの苦い体験で青年時代を終えた。ペロポネソス戦争の敗北とソクラテスの処刑を体験した彼にはもはやアテナイ民主政が理想的政体など信じられず、その激しい権力闘争・デマゴグ支配・衆愚政に至っては唾棄すべき政体であった。また、師ソクラテスの「徳は知なり」の教えは彼を民主政嫌いにしていった。個人にとっても、国家にとっても、善き生活というものが客観的に存在する。従ってこれを学問研究の対象として知的に認識することが可能である。かかる学問的真偽の基準を数や世論に委ねるわけにはいかない。こうした主知主義、知的エリート主義が彼の政治思想を貫く指導原理となる。

ソクラテスの死後、プラトンは28歳頃から、12年にわたって広くギリシア世界、エジプト、南イタリアを遍歴し、執筆活動を始めた。シチリアのシュラクサイでは僭主ディオニュシオス1世の宮廷で歓迎され、弟子となる義弟ディオンを通じてシュラクサイの改革に関与することになる。

プラトンは紀元前387年頃、40歳頃アテナイに戻り、学園「アカデメイア」を設立し、自らの政治理念を植え付けるべく若者の教育に乗り出した。ここでは自然哲学、特に幾何学や天文学が重視された。こうした政治理念の教育に燃えるなかで書いたのが彼の主著『国家』である。プラトンは紀元前367年からは、その6年後にも再度、シュラクサイの若き王ディオニュシオス2世の教育によって自らの政治理念の実現に乗り出したが、宮廷闘争に巻き込まれ、弟子のディオンは暗殺され、失敗した（第7書簡に詳しい）。プラトンは晩年には自らの理想国家の実現の困難さを理解し、『政治家』と『法律』を書き、次善国家を構想することになるが、ここでは扱わない。

### 2. 1 知識と臆見—自然（physis）と慣習（nomos）—

プラトンの根本思想は師ソクラテスの「徳は知なり」の教えである。個人にとっても、国家にとっても、善というものが客観的に存在する。従って、その何たるかを認識し、如何なる方法でそれを実現できるかを究明するのは知識の問題である。人々は印象や感覚でもって、何が善であり、どうすればそれに到達できるか様々に論じているが、臆見による議論にはきりが無い。知識はかかる臆見とは全く異なったものである。

洞窟の比喻では、臆見と知識の違いはこう説明される（第7巻）。我々は洞窟に囚われの囚人であり、影を見ているに過ぎないのに、本物を見ていると錯覚しているだけの存在なのである。洞窟から開放され、太陽の下に出、その強烈な光に耐えて始めて本物を見、知識をうることが出来るのだ。

善の知識は証明でき、唯一不変のものであって、慣習のように国や人によって異なる様なものではない。ここでは、人々がそれを欲するかどうか、現実や経験がどうかといった問題は無意味である。善は人々がどう考えるかに関係なく客観的に存在するものであり、それが実現されるべき所以は人々がそれを欲するからではなく、まさにそれが善だからである。善のアイデアは現実や経験の世界を見る際に基準、模範、典型として作用するもので、現実や経験の世界がそれから離れていれば離れている程、墮落していることの証拠であり、批判されるべき対象なのである。

こうしたプラトンのやり方は数学、特に幾何学の方法である。幾何学や天文学の円や三角形は現実や経験とは無関係に、純粹に思弁的に存在するものであり、現実や経験の世界を見る際に基準、模範、典型として作用するものである。

プラトンはアテナイ民主政の苦い体験のなかで、この幾何学的＝思弁的方法を彼の国家論に全面的に適用し、アテナイ民主政の対極に理想国家を構想することになる。統治は知識の問題であり、統治者は何が国家及び個人にとって善であるか

知っていなければならない。従って、善を認識した哲学者が支配すべきことは自明であり、彼に支配する資格を与えるのはその知識である。かかる知恵者を慣習たる法律で縛るなどということは馬鹿げたことである。名医をしてわざわざ教科書通りの学生じみた処方方をさせるようなものである。こうして、彼の理想国家は1人の哲人王、あるいは少数の知的エリート支配の啓蒙専制主義となる。

この知識万能、専門化は統治者に限ったことではなく、あらゆる職業が知識の問題とされ、国家とは様々な専門家が集まって相互の需要を満たし、もって文明生活を送る共同体だとされる。こうして、彼の理想国家は仕事の専門化=分業と階級間の分断の上に築かれることになる。アテナイ民主政の自由・平等の理念、全市民が政治に参加するという理念の対極に、理想国家が構想されることになる。

## 2. 2 典型としての国家

統治者は善のアイデアを認識した哲学者でなければならず、国家の成員すべてが各々の技に通じた専門家でなければならないという提言によって、プラトンは理想国家、つまり典型としての国家を構成する観点を手に入れた（第2巻～4巻）。国家とは各成員が相補って相互の需要を満たし、もって道徳的な文明生活を送るために作られた共同体である。人間は様々な物を必要としながら、すべてを自給することはできないので、国家を作って相互の需要を補い合うことになったのである。その前提条件は仕事の専門化=分業である。

交換によって需要を満たすには、各人は自分が提供する物は必要量以上に持っていなければならないし、受け取る物は必要量以下でなければならないからである。農民は自分の必要量以上の食料を生産し、靴屋は自分の必要量以上の靴を生産して始めて、交換がお互いに有益となる。仕事の専門化=分業の前提は人間は各々その適性が異なり、適性にあった仕事に熟練するということである。統治者や軍人も、農民や靴屋と同じで、自分の適性によってその技術を身につけた専門家である。ここでは、職業は自由意志による選択の問題ではなく、適性と訓練によって得た特権であると同時に義務である。自由意志による選択に任せ、人々が何にでも手と口を出し、仕事に熟練しないことから混乱が生まれるのである。

国家の需要は3つの種類からなり、従って3つの階級に分けられる。先ず物質的な需要が満たされなければならない、それに国家の防衛と統治という需要が満たされなければならない。それに対応して、物を生産する労働者、それに守護者である軍人と統治者に分けられる。3つの階級とは人間に3種類あるということであり、本性が労働に適している、国家の守護に適していない人々、国家の守護に適しているが、他の人の指示によるという条件付きの人々、それに善の知識をもった統治に通じた人々である。個人においては、人間の魂が3つの部分からなるということである。第1は欲望を司る魂で、横隔膜の下にあり、第2は勇氣、氣概を司る魂で、胸部にあり、最後に思惟を司る魂で、頭部にある、と考えた。

需要	3つの階級		人間の魂	その徳
物質的需要	労働者：金儲け階級		欲望的部分	節制
防衛	守護者	軍人：補助者階級	氣概的部分	勇氣
統治		統治者：守護者階級	思惟的部分	知恵

ここで、正義とは「各人に各人のものを与える」ことであり、これに調和がかかっている。国家の成員を適材適所に配分すれば自動的に調和が生まれるし、その失敗から混乱が生じる。その本性が

統治者に適した者が労働者になってはならず、統治者の地位を引き受けねばならない。その本性が労働者に適した者はその本来の資格たる労働者の地位を引き受け、統治に口を出してはならない。

統治者に適した者が統治を引き受けず、労働者に適した者が統治者になったり、統治に口を出すことから混乱が生まれたのである。政治的能力はあげて統治者のものであり、労働者は政治的には命令に服従すること以外することはないし、またしてはならない。欲望が理性の判断に加わったり、理性に命じるなどもつての外であり、欲望は理性の命令に服従すること以外にすることはないし、またしてはならないのである。

こうして、プラトンの理想国家は専門化=分業という観点から、階級間の分断を特徴とする、1人の哲人王、あるいは少数の知的エリート支配の啓蒙専制主義が帰結した。アテナイ民主政の全市民が政治に参加するという理念こそが混乱の原因だと考えたのであり、その対極に理想国家を構想するものであった。

### 2. 3 典型としての国家設立の条件

典型としての国家設立の条件は2つある。1つは消極的条件、つまり障害の除去であり、もう1つは積極的条件である。前者は共産主義の理論であり、後者は教育の理論である(第5巻~7巻)。

プラトンの共産主義の理論は2つの形態をとる。1つは私有財産を禁止し、共同宿舎で居住・食事することを義務付けたことであり、もう1つは家族を廃止し、女性と子供を共有にし、結婚・出産統制を行ったことである。プラトンはこれを守護者階級(統治者と軍人)に限った。守護者階級の貪欲を矯正し、公の使命に献身させるには、私有財産を廃止するしか道はないと考えたからである。プラトンは近代の共産主義とは逆に、共産主義を実現するために政治を使うのではなく、政治への有害な影響を除去するために共産主義を使うというのである。

家族の廃止も同じである。守護者階級が公の使命に献身するのに、私ごとの家族が妨げとなると考えたからである。家族の廃止にはもう1つ目的がある。彼は人間が家畜の繁殖の場合には良き子供が得られるよう気を配るのに、自分たちの結婚・出産にあたっては行き当たりばったり・でたらめ

に行うことに驚いた。人間も家畜のように、良き子供が得られるように結婚・出産を統制すべきだと考えた。

プラトンが理想国家実現の条件としてより重視したのは教育であり、国家は教育施設の観さえ呈する。これはプラトンの根本思想からの当然の論理的帰結である。徳が知らず、それは学ぶことも教えることもでき、教育こそが良き国家に不可欠のもので、国家は教育如何にかかっている。これ程重要な教育をアテナイのように、家庭教育や商業的教育に委ねることは致命的欠陥であり、国家自らが行わなければならない。また、女性を教育や政治から排除してはならず、女性も男性と同じように教育を受けさせ、国家のなかに地位を占めさせなければならない。これは女性の権利主張ではなく、その自然的本性においては男女に相違がないことの論理的帰結であった。

プラトンの教育計画は基本的に2段階からなる。20歳までの青少年に行う初等教育とそこで選抜された優秀な男女に行う高等教育であり、高等教育は更に30歳で選抜された特別に優秀な男女に50歳まで続行される。初等教育の目的は肉体的・精神的訓練であり、内容は体操と音楽・詩歌である。青少年の健全な発達に有害な書物や音楽はすべて検閲によって禁止されなければならない。高等教育は初等教育で優秀であることが証明された男女に対し、守護者階級、更に統治者になるべく行う教育である。その教育内容は数学、幾何学、天文学、問答術だけであり、こうした精密な学問だけが知識、そして善のアイデアの認識に導くと考えた。こうした高等教育は彼自身がアカデメイアで実際にやっていたことであった。

### 2. 4 現実の国家=典型としての国家からの墮落態

プラトンにとって、現実の国家は以上述べた典型としての国家(王政か貴族政)からの墮落態でしかない。典型としての国家から離れていけば離れている程、それだけひどく墮落している。彼は現実の国家を墮落の程度に応じて、4つの純粋形

	人間類型	人間の魂
1. 榮譽政：気概による国制	好戦的な愛誉の人間	気概的部分
2. 寡頭政：財産による国制	けちん坊の愛銭の人間	欲望的部分—必要な欲望
3. 民主政：自由・平等による国制	放縦な快樂の人間	〃 — unnecessary欲望
4. 僭主政：隷属による国制	邪悪な狂気の人間	〃 — 氣違いじみた欲望

態に分けた（第8巻～9巻）。

プラトンが批判の念頭においているのは、勿論、民主政であり、アテナイの民主政である。アテナイの民主政をスパルタの榮譽政より悪しき国制と位置づけ、民主政を激しく批判した。民主政は財産による差別に基づく寡頭政に対する民衆の勝利から生まれる国制であり、ここでは自由・平等が最高の価値とされ、民衆は何の権威・理性も認めず、放縦な快樂の人間が支配する衆愚政である。民主政は必然的に無秩序状態を招き、デマゴグの支配を招き、結局は最悪の僭主による独裁を招くだろう。過度の自由・平等は過度の隷属を招く、というのがプラトンの政治的知恵の教えであった。プラトンの典型としての国家はこうした民主政の全面的否定の上に構築されたものであった。

以上がプラトンの政治思想である。それはアテナイ民主政の理念を全面的に否定し、その対極に理想国家を構築していた。その原因は政治を知識の問題とみたことにある。この点に疑問を呈し、新しい政治思想を展開するのが、彼の最大の弟子アリストテレスである。政治は経験の問題でもなからうか、と。家に住む人はその家が住みよいかどうか建築家に教えてもらわなければわからないものであろうか。お客は料理がおいしいかどうか料理人に教えてもらわなければわからないものであろうか（『政治学』第3巻11章）。

### 3. アリストテレス（紀元前384頃—322年）

プラトンがシュラクサイの改革に乗り出していた紀元前367年頃に、プラトンの最大の弟子になる当時17歳位の若者がプラトンの学園アカデメイアに入ってきた。マケドニアのスタゲイロス生ま

れで、国王侍医の息子のアリストテレスである。アリストテレスの生物学に対する主要な関心は、恐らく、父親の職業から受け継がれたものであろう。アテナイはかつての帝国主義的栄光は失っていたが、まだ「ギリシアの学校」としてギリシア最高の文化を誇っており、プラトンの学園は高度な学問を修めるのに適していた。アリストテレスはプラトンの死（紀元前347年頃）まで20年間アカデメイアにとどまり、プラトンの教えからぬぐいがたい影響を受けた。

アリストテレスはプラトンの死後アカデメイアとアテナイを去り、紀元前343年にはマケドニア王フィリッポス2世に招かれ、当時13歳の若き王子アレクサンドロス（紀元前356—323年）の教師になった。アリストテレスは若き王子にギリシア都市国家の文明、特にホメロスの英雄叙事詩を教え込み、アレクサンドロスもギリシア文明の決定的な影響を受けた。アリストテレスにとって文明が可能なのはギリシア都市国家においてだけであり、マケドニアのような専制統一国家は野蛮な過去の遺物にすぎず、ギリシア文明で教化すべき対象でしかなかった。フィリッポスもアレクサンドロスもギリシア文明いかれで、アレクサンドロスは後に東方遠征に出発するにあたって、わざわざトロイを訪れ、アテナの神殿に奉納し、自らを同化していた英雄アキレウスの墓にもうでることになる。アテナイは紀元前338年のカイロネイアの戦いでフィリッポスに敗れ、マケドニアの支配下に入り、マケドニアがギリシア都市国家を支配下におくことになるが、こうした信念は揺るがなかった。

アリストテレスは紀元前336年にフィリッポスが暗殺され、アレクサンドロスが即位すると、ア



レクサンドロスの保護の下に、アテナイに戻り、翌335年に自分の学園リュケイオンを開いた。ここでアリストテレスは学生を率いて様々な調査を行い、158のギリシアの都市国家の国制史の調査も行った。そして、こうした調査による経験的な研究によって、彼が学園を開いた時に手元に持っていた一連の著作に増補・改訂を加えていった。アリストテレスの著作は出版用に書かれたものではなく、長年にわたって書き変えながら使われた講義ノートである。

紀元前323年にアレクサンドロスが急死すると、アテナイでも反マケドニアの反乱が起き、アリストテレスは向いのカルキスに逃げたが、翌322年に62歳で病死した。二度結婚し、子供は後に倫理学の著作を編集することになるニコマコスという名の息子が1人いた。

『政治学』も長年にわたって増補・改訂が加えられた講義ノートであり、長年にわたって書き換えられているために、思想の変化を含んでいる。それは3つの部分からなり、1. 有機体論的国家論(第1巻)、2. 理想的国家論(第2～3巻、第7～8巻)、3. 現実的国家論(第4～6巻)からなる。書かれた順番は、恐らく、プラトンの延長線上にある理想的国家論が最初で、次にギリシア都市国家の国制調査を行った後に現実的国家論を書き、最後に有機体論的国家論を前に付けたであろう。

### 3. 1 有機体論的国家論—発展の最高段階(「目的因」)としての自然—

有機体論とは生物学的世界観、つまり生物学からの類推で世界を見る見方であり、アリストテレスが確立した世界観である。アリストテレスは自身生物学者であり、生物学の類推を基に有機体論的世界観を確立した。彼が目指すのは絶えざる変化であり、成長・発展であり、そこに内在している目的に向かう運動である。最も原始的なものが最初に現れ、最も完成したものが最後に現れ、自然は最初から内在しているが、最後にその本性を現す。例えば、にわたりの卵とへびの卵は見分

けがつかないかもしれないが、成長し、大人になり、卵の中に内在していた本性を明示すると誰でも区別がつき、にわたりの卵がへびになることは決してない。プラトンは自然をイデアとして数学的・幾何学的に捉えたので、知識偏重となり、現実や経験に対して革命的となったが、アリストテレスは自然を成長・発展として生物学的に捉えたので、現実や経験の方が重要になり、経験主義的・改良主義的になる。

アリストテレスは有機体論的国家論をこう展開する。人間は本来的に共同体を求める存在であり、人間は本来的に肉体的・知的に不平等で、支配・服従の関係にある。先ず、繁殖や衣食住という基本的な欲求から家族という共同体が生まれた。ここでは家長が妻・子・奴隷を支配している。次の段階では、家族が集まって村という共同体が生まれた。そして最後に、村が集まって、発展の最高段階として国家という「自足的な」共同体が生まれた。ここで「自足的」とは、国家はもともとは相互の需要を満たすために生まれたが、善き生活、つまり文明生活のためにあるということである。人間は学問・芸術・宗教の文明を生み出す唯一の存在であり、それは発展の最高段階に達した国家においてのみ可能になるのである。アリストテレスはそれを「人間は自然においてポリスの動物である」と宣言した。これは発展の最高段階に達したギリシアのポリスにおいてのみ文明生活は可能であるという意味である。アジア的専制支配のペルシア帝国やマケドニア王国は時代遅れ、発展段階遅れの野蛮だと考えた。

### 3. 2 理想的国家論

アリストテレスは理想的国家論を論ずるにあたって、国制を2つの観点から分類した。1つは善き生活のための共同体という国家の目的からする倫理的規定で、全体の利益を目指すかという観点であり、もう1つは最高権力を有する役職の秩序付け、つまり最高権力者が1人か少数か多数かという観点である。この2つの観点から6種類に分類した(第3巻)。

最高権力者の数	正しい国制	悪しき国制（墮落態）
1人	1. 王政	1. 僭主政（主人的・独裁的支配）
少数	2. 貴族政	2. 寡頭政（富者の支配）
多数	3. ポリテイア	3. 民主政（貧者の支配）

理想的国家は第1に王政、次に貴族政、最後にポリテイアである。（悪しき墮落態は最悪が僭主政、次が寡頭政、最後が民主政である。）アリストテレスはプラトンが主張するように、善のアイデアを認識した1人の哲人王、あるいは少数の知恵者が現実に実在するならば、王政や貴族政が最善の国制であることを認める。そういう人間は神や神々であり、支配権を認めるのは当然のことであり、人間が作った法律で縛るなどということは馬鹿げたことである。

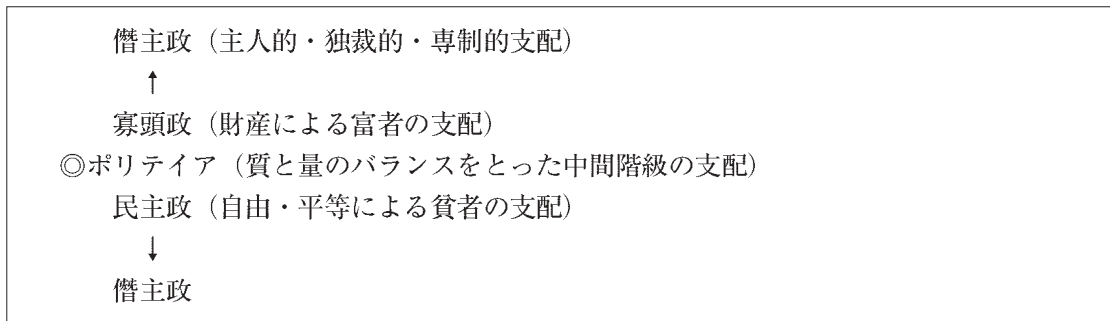
しかし、アリストテレスはそうした人間は現実には実在しないと考えたし、実在すると想定すること自体が危険なことだと批判した。法は「欲望をもたない理性」であり、「法による支配」は文明生活を保障するが、「人による支配」は「怪物」

に活動の場を与え、文明生活を破壊し、最悪の僭主政に道を開くのではないか。政治的知恵もプラトンが主張するようなアイデアの認識の問題ではなく、長年の経験や多くの人の集合的英知のうちにあるのではなからうか。

ここに、アリストテレスは理想的国家論の執筆を放棄し、現実的国家論に向かう。

### 3. 3 現実的国家論

アリストテレスが実現可能な最善の国制だとするのはポリテイアであり、これは寡頭政と民主政の中間の混合政体である（第4巻）。アリストテレスの座右の銘は「やり過ぎるな」というデルポイの神託から作った「徳は中庸にあり」だが、ここでもそうである。



寡頭政は財産による富者の支配であり、世襲化・特権化・閥族の支配を招き、僭主政を招きやすい。民主政は自由・平等による貧者の支配であり、デマゴグの支配を招き、僭主政を招きやすい。それに対して、ポリテイアは富者と貧者の中間階級の支配である。中間階級は富者のように貧者を軽蔑して傲慢になり、閥族を作ることはなく、貧者のように富者を嫉妬して無頼漢になり、デマゴグに従うこともなく、最も安定した支配をもたらす。ポリテイアは寡頭政の富・家柄・教育といった質の契機と民主政の数という量の契機にバ

ランスをもたらす、最も安定した支配をもたらす。

アリストテレスは中間階級が多数を占めるポリテイアだけが寡頭派と民主派の激しい権力闘争に明け暮れるアテナイやギリシア都市国家に安定をもたらすのであり、それは実現可能だと考えた。

### 4. 結び

プラトンとアリストテレスの政治思想は後のヨーロッパ文化に決定的な影響を及ぼすが、彼らの生きた時代で見れば、彼らの試みは失敗であり、アリストテレスの晩年には既にギリシア都市国家

は彼らが考えもしなかった所から終局を迎えていた。プラトンとアリストテレスの理想は寡頭派と民主派の激しい内部抗争にさらされたアテナイとギリシア都市国家の実態に正確に対応していた。しかし、アテナイとギリシア都市国家の運命は国内問題を処理する知恵ではなく、都市国家間の同盟関係、そして何よりも彼らが野蛮だと軽蔑する周囲の強大な統一国家、東にペルシア帝国、北にマケドニア王国という強大な統一国家にかかっていた。こうした対外関係を無視し、ギリシア都市国家内部に視野を限ったことが彼らの決定的な誤りであった。

ギリシア都市国家はそもそも対外関係に決定的な欠陥をもっていた。都市国家は市民の自治・自足共同体であることによって、他国との同盟関係をひどく嫌うという性格をもともともっていた。ペルシア戦争ではアジア的専制に対してギリシア文明を守るということで、スパルタとアテナイの軍事的指揮の下にまとまることができたが、これが最初で最後であった。強大な統一国家に対抗するには汎ギリシアで同盟する以外に手はなかったが、ギリシア都市国家はお互いの内部抗争に介入して、対立しあった。ギリシア都市国家の時代が終わったことを明示したのは、皮肉にもアリストテレスの教え子でギリシア文明いかれのアレクサンドロス大王であった。

## 第2章 キリスト教の政治思想—アウグスティヌスとアキナス—

### 1. キリスト教：イエス・キリストからローマ・カトリック教の成立まで

ヨーロッパ文化はキリスト教文化であり、ヨーロッパ文化の根幹はキリスト教にあり、その根幹の上に古代ギリシア・ローマの異教文化を総合したものである。ヨーロッパにおいてはキリスト教はローマ・カトリック教であり、その正統教義を確立するのに最も貢献し、最大のキリスト教教父になるのがアウグスティヌス（354-430年）であり、壮大な神学体系を築き、最高のスコラ神学者

になるのがアキナス（1225-74年）である。

キリスト教はユダヤ教から生まれる宗教で、一般にイエス・キリストと呼ばれている人物を神の子と信じることによって成立した宗教である。イエスというのはギリシア名で、新約聖書がギリシア語で書かれていることによるもので、イエスはユダヤ人であり、ユダヤ名はヨシュアである。キリストというのはメシアと同義語で、油を注がれた者という意味で、ユダヤ民族においては王や政治指導者の意味で使われた。それがキリスト教では、キリスト・メシアが神の子であり、イエスは神の子であるとされた。ここにイエスは人間であると同時に神であるとされ、キリスト教は神と子と聖霊の三位一体の教義を根幹とすることになり、困難な問題もはらむことになる。

イエスという人物が実在し、紀元前4年頃にローマ帝国の属領カナーン（パレスティナ）のガリラヤの町ナザレに生まれ、紀元後30年頃にユダヤの町エルサレムで、ローマ総督ピラトゥスによって十字架にかけられ、死んだ、ことは間違いない。

福音書では、イエスはこう説明される。イエスは処女マリアから神の聖霊によって生まれ、大工のヨセフとマリアの子として育てられ、大工をやっていたと思われるが、洗礼者ヨハネの弟子となった。洗礼者ヨハネはヨルダン川のほとりで、神の国が近づいており、罪を悔い改め、そのしるしとして洗礼を受けなさいと直接民衆に訴え、多くの信者を集めていた。ヨハネの処刑後、イエスは自らメシアと自覚し、布教活動を始めた。

まず、ガリラヤで、漁師のペテロ以下漁師や大工や取税人といった下層の若者を弟子にし、布教活動を行った。イエスが説いたのは、1つは、洗礼者ヨハネと同じく、神の国が間近に差し迫っているという終末論である。2つめは律法の成就としての愛の教えであり、神の国に入るための生き方を説くもので、最も後世に影響を及ぼすのは自発的な絶対的清貧の教えである。「富んでいる者が神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方がもっと易しい」、神の国に入りたいのなら全財

産を売って貧しい人に与え、私に従いなさい、と教えた。そして、イエスが最もやったのが奇跡であり、多くの病人を治療し、多くの死者をよみがえらせた。それによって、弟子たちはイエスをメシアだと信じたし、多くの貧しい民衆や女性が信者として集まった。

次に、受難を受けるために、弟子をつれてエルサレムにのぼり、布教活動を行った。ユダヤ教の祭司長や律法学者と対立し、死を悟ったイエスは最後の晩餐を催し、弟子たちにパンとブドウ酒で私の体と血を憶えよと教えた。大祭司のもとでの裁判で、神の冒涇罪で死刑判決を受け、ローマ総督ピラトに引渡され、叛逆罪で十字架の磔刑を宣告された。茨の王冠をかぶされ、ゴルゴタの丘の処刑場で十字架にかけられ、死に、墓に埋葬された。

ところが、その3日後に復活し、逃げていた弟子たちの前に現れ、イエスの復活をまのあたりにした弟子たちは今度はペテロを中心に使徒として福音を伝道してゆく。イエスが贖罪の子羊として人類の罪を背負って死んだので、イエスを神の子だと信じて洗礼を受けさえすれば、誰でも救われ、神の国に入れる、と。ここにキリスト教がユダヤ教の分派として始まり、ユダヤ教から激しく弾圧されたが、その迫害者からパウロが回心し、最大の伝道者になるに及んで、キリスト教は伝道体制を確立し、ユダヤ教から独立していった。

キリスト教はエルサレム教団、ガリラヤ教団、アンティオキア教団を拠点にして、ローマ帝国支配下の地中海一帯に急速に広まっていった。64年にはローマ帝国の首都ローマで皇帝ネロ（在位54-68年）によって弾圧されるようになるまで広まっていた。ローマの宗教は多神教で、国家守護宗教であり、多神教という点では他の宗教に対して寛容であったが、国家守護宗教として宗教統一を破壊する宗教に対しては洗神即叛逆罪として弾圧する。キリスト教はその正反対で、唯一神の宗教で、個人の救済宗教であり、多神教の異教や皇帝崇拜を偶像崇拜として全面的に拒否する宗教である。キリスト教が急速に拡大した理由は唯一神

の宗教としての攻撃性と個人の救済を保証する魅力、それに司教職と聖書を中心にした組織性であった。

キリスト教の政治思想は迫害のなかでも急速に拡大するなかで、大きく変化する。初期キリスト教はローマ帝国による迫害のなかで終末論と武力抵抗論を強固に持ち続けていたが、急速に拡大するなかでそれを必要としないだけでなく、有害なものになる。それに取って代わるのが「受動的服従論」と呼ばれる無抵抗服従論であり、これがキリスト教の最初の正統政治思想になる。それはパウロ（ローマ13・1～7）とペテロ（1ペテロ2・13～17）によって唱えられていたもので、この世の国家・権力に対する悲観主義は変わらないのだが、この世の国家・権力も存在する以上神によって設立されたものだとして消極的に正当化した。少なくとも原罪によって墮落した人間に対するムチとして正当化した。更に触れておくと、終末論自体を無害にする正統教義を理論化するのもアウグスティヌスであり、アウグスティヌスは終末論は信者の心のなかで信仰が勝利することの比喩であり、千年王国も既にキリスト教会で実現されている、と理論化することになる。

キリスト教は皇帝ネロの後には、ドミティアヌス（在位81-96年）、マルクス・アウレリウス（在位161-80年）、デキウス（在位249-51年）、ウァレリアヌス（在位253-60年）、ディオクレティアヌス（在位284-305年）の下で、断続的に弾圧された。キリスト教徒はロバの頭を崇拜し、子供を犠牲として捧げ・殺した後食べ、乱交・近親相姦のオルギーの夜の集會を催す気違い集団だとする、後の異端弾圧に共通の神話も確立していた。しかし、それでもキリスト教は拡大を続け、3世紀末までにはもはや弾圧しても排除することは不可能になった。地域では、パレスティナ、シリア、エジプトの東地中海から、小アジア、ギリシャの東ローマ帝国の心臓部まで多数派を確立し、カルタゴを中心とする北アフリカ、ローマとナポリを中心とする西ローマ帝国の心臓部でも多数派を形成し、それに南フランス、南スペインでも広まっていた。

帝国の宮廷や軍・官の高官の間にも広まり、皇帝コンスタンティヌスの母親も信者であった。

キリスト教は遂に313年に皇帝コンスタンティヌス（在位324-37年）によって公認され、ユリアヌスの下で一時的な揺り戻しもあったが、392年には皇帝テオドシウス（在位379-95年）によって国教となった。キリスト教は国教になると、それ以前とは全く異なる性格を帯びざるをえなくなる。国家と一体化し、国家の統一には宗教の統一が不可避となり、キリスト教正統教義の確立が帝国統治の最重要課題になる。キリスト教は成立以来教義をめぐって激しく対立していたが、国教となった今は、正統と異端をはっきりさせ、カトリック正統教義を確立しなければならなかった。それに献身し、最大のキリスト教教父になるのがアウグスティヌスである。

ローマ帝国はテオドシウス帝以後最終的に東西に分裂し、衰退期に入るが、西ローマ帝国の衰退が顕著で、永遠の都ローマを見捨てて首都をミラノ、更にはラヴェンナに移してしまう。蛮族のゲルマン諸民族が大移動を開始し、西ローマ帝国は遂に476年に滅亡する。それに代わって西ローマ帝国を代表してくるのがローマ司教である。ローマ司教はペテロの後継者であり、別格であるとして、教皇を名乗るようになる。イエスが教会の土台と天国の鍵を与えたのはペテロであり（マタイ16・18-19）、初代ローマ司教として殉教したペテロを継承し、その墓の上に教会（サン・ピエトロ大聖堂）をもつローマ司教が優位する、と主張した。ここに、キリスト教も東西に分裂し、西方キリスト教はローマ・カトリック教として成立することになる。

## 2. アウグスティヌス（354-430年）

### 2. 1 生涯、論争、正統教義の確立

アウグスティヌスは『告白録』以下多くの自伝・証言を残しているので、当時の人間としては例外的に生涯が非常によくわかる。

アウグスティヌスは354年にローマ帝国の属州であった北アフリカのタガステで生まれた。北ア

フリカはローマの穀倉で、特にオリーブ、小麦、果物の産地であった。父はローマの市民権をもつ下級官吏で、母モニカはベルベル人であった。宗教的には父はローマの伝統的な宗教であったが、母はカトリックのキリスト教徒であった。両親は頭の良い息子を帝国官吏か収入の良い修辞学教師にしようと、貧しい家計をやりくりし、仕送りが続かない時はパトロンを見つけて、学校にやった。良妻賢母の母モニカは夫の死後は息子のアウグスティヌスを溺愛することになる。

アウグスティヌスは7歳で学校に通い始め、13歳で隣町の学校、そして16歳で北アフリカの中心都市カルタゴの学校に通い、ラテン語の文法・修辞学・文芸などを学んだ。強く感銘を受けたのはローマ最高の詩人ウェルギリウスとローマ最高の哲学者キケロであった。ギリシア語も学んだが、マスターできず、余り優秀な生徒ではなかった。親元を離れて遊びに忙しく、大都市の歓楽街で女遊びに夢中で、17歳で女性と同棲し、男の子を生んだ。より重要なのは、ローマ帝国によって禁止・迫害されていたにも拘わらず、北アフリカに広まっていたマニ教の影響を受け、マニ教に入信したことである。

マニ教はペルシア人マニが3世紀にゾロアスター教を基に、仏教・キリスト教をくっ付けて始めた善悪二元論の宗教である。この世は善=光と悪=闇が闘う世界であり、光の国を支配する神と闇の国を支配する悪魔が闘う世界であり、最終的には闇の国は火で焼き尽くされ、滅びる。人間は肉体をもって生まれ、闇の国に閉じ込められているが、光の国からきた靈魂を持っており、それに気づけば光の国に戻ることも可能なのであり、神はそのために仏陀、イエス・キリスト、そしてマニを預言者として派遣したのである。マニ教は絶対的禁欲の宗教であり、既に光の国の住人になった完徳者にはそれを要求するが、一般信徒の聴聞者には禁欲は要求されなかった。

アウグスティヌスがマニ教にひかれて聴聞者になったのは、禁止・迫害されている信徒の集まりの親密さ・選民意識からであり、それに善悪二元

論の説得力からであったろう。

アウグスティヌスは374年、20歳でカルタゴの学校を終えると、先ず故郷のタガステで教師になり、母モニカとともに、立身出世のチャンスをねらった。次にカルタゴで修辞学教師となり、次にローマで修辞学教師となり、そして遂に384年、30歳で、当時の西ローマ帝国の首都ミラノで宮廷修辞学教師の地位を手に入れた。宮廷修辞学教師の仕事は皇帝や宮廷の主だった人の祝祭日の演説の原稿を書いたり、年代記を書いたりすることであり、更なる立身出世のチャンスの多い仕事であった。母モニカは息子の立身出世の邪魔になると内縁の嫁はアフリカに帰した。ミラノには司教兼宮廷顧問としてアンブロシウスとその師シンプリキアーヌスがあり、アウグスティヌスはその影響を受けて、立身出世や宮廷よりもキリスト教や修道院の方に関心が移っていった。

アンブロシウスとシンプリキアーヌスはビザンティン・東方教会のギリシア教父のキリスト教と新プラトニズム哲学を総合した神学を取り入れており、その影響を強く受けるようになった。自身新プラトニストではプロティノスとポリュフィリオスの著作を読んでいる。

キリスト教は体系的宗教になるには、哲学体系と総合した神学を築くしかなく、古代哲学のなかでは新プラトニズムが唯一神の宗教と総合するのに最も適した哲学体系であった。新プラトニズムは一者から宇宙霊が階層秩序をなして流出し、愛憎（吸引と反発）の絆で結ばれた人間化された宇宙論を展開し、一方で小宇宙、神の写したる人間が瞑想によって浄化され（魂の肉体からの分離）、上昇し、照明され、神と法悦的合一すべき神秘的宗教論を主張し、他方で小宇宙、神の写したる人間が操作すべき実践的学問としての魔術を主張していた。マニ教の善悪二元論との関連で言えば、新プラトニズムは悪の問題をこう見事に解決していた。この世は一者の階層秩序をなした流出であり、この世の一切のものは上下の階層秩序に応じて一者にあずかる霊的存在であり、この世に悪は実在しない。悪は実体としては存在せず、一者か

ら離れること、より少なく善、善の欠如にすぎない。

アウグスティヌスは386年、32歳でキリスト教に回心し、翌年にアンブロシウスから洗礼を受け、キリスト教徒になった。彼はこの回心について実に様々な説明をしている。最も有名な『告白録』の説明では、回心は突然のものであったと言う。それはミラノの自宅の庭での出来事で、隣家の庭で遊ぶ子供たちの歌声が神の啓示のように聞こえてきた。「取って読め、取って読め」と聞こえ、急いで部屋に戻り、聖書を開けると、ローマ人への手紙13章の最後の箇所、「眠りからさめるべき時が、すでにきている・・・主イエス・キリストを着なさい」という箇所であった。彼の心は震え、やがて静まり、安らぎを感じ、回心した。

この説明はたとえ本当の話だとしても、回心の最後のきっかけを説明しているに過ぎない。回心は明らかにアンブロシウスとシンプリキアーヌスの影響を受け、新プラトニズムの影響を受け、キリスト教と新プラトニズム哲学の総合のなかで起こったことは間違いない。それにもう1つは、キリスト教修道院の創始者アントニウス（251-356年）の伝記を読み、修道院生活に魅了されたことであった。アウグスティヌスは回心後ただちに修道院生活を実践しているからである。

アウグスティヌスはキリスト教に回心すると、修道院生活に入るべく、職を辞し、388年には北アフリカに帰り、タガステに修道院を設立した。その途中のローマで母モニカは死に、着いてすぐに息子も死んだ。アウグスティヌスは生涯を修士で過ごすつもりであったが、ヒッポの司教に請われ、断りきれずに、修士のままで、司祭、司教補佐、そして396年に司教となり、死ぬまでヒッポの司教にとどまった。司教の主だった仕事は説教、裁判、教会管理、そして何よりも異端との論争であり、アウグスティヌスは生涯を異端との論争、正統教義の確立に捧げることになる。

先ず、アウグスティヌスがやったのはドナトゥス派との大論争であり、これは30年続いた。ドナトゥス派の始まりは、多くの聖職者が迫害時代に

は棄教し、迫害が止むと教会に戻ったが、そうした聖職者が行った秘蹟は有効か無効かの論争である。教会の聖職者の秘蹟力は聖職者個人のものか教会の職務によるものか、という今後も聖職者が墮落すると繰り返される論争である。カルタゴの司教ドナトゥスの名がつけられたドナトゥス派は、そうした裏切者の聖職者が行った秘蹟は無効だと主張し、分派を作り、洗礼をやり直した。アウグスティヌスは、秘蹟力は個々の聖職者ではなく、イエス・キリストの体としての教会にあるのであり、裏切者の聖職者によるものでも、教会の職務としての秘蹟力は損なわれまいと主張し、これが正統教義になる。ドナトゥス派は教会会議で繰り返し異端と断罪され、皇帝も繰り返しドナトゥス派異端弾圧の勅令を出すなかで、終末論に基づく反ローマ抵抗運動となり、潰滅した。

次に、アウグスティヌスがやったのはペラギウス派との大論争であり、これは晩年の20年続いた。ペラギウスはブリタニアの修道士で、人間の自由意志論を展開し、多くの支持者を集めていた。人間は神によって自由意志を与えられ、善悪を選択・実行する能力を付与されて創造された存在であり、人間は自由意志によって救いに至ることができる。従って、原罪はなく、予定もない。自由意志によって救いに至ることを選択・実行する者には神の恩寵が必ず与えられるが、人間の自由意志が主であって、神の恩寵は従である。それに対して、アウグスティヌスは、マニ教との論争では人間の自由意志を強調していたが、ここでは神の恩寵論を展開する。人間は自由意志を与えられて創造されたが、自由意志は悪への意志・能力でしかない。人間は肉体をもち、情念と自己愛に支配され、原罪から逃れるすべはなく、人間はすべて罪人であり、神の恩寵によってのみ救済にあずかれる。この原罪－神の恩寵論がローマ教皇の支持によって正統教義となり、ペラギウス派は異端と断罪された。

アウグスティヌスの晩年には、西ローマ帝国の滅亡の危機が迫ってきた。ローマ帝国の永遠の都ローマは408年にアラリック王率いる西ゴート族

によって包囲され、410年に陥落し、破壊と略奪と暴行の限りを尽くされた。蛮族による永遠の都の破壊はローマ市民に衝撃を与え、不滅のローマ帝国に迫る滅亡の危機を前に、かかる災いはキリスト教の神と宗教を受け入れ、ローマの伝統的な神々と宗教を捨てたことが原因だとする非難が高まった。アウグスティヌスの主著『神の国』はそれに対するキリスト教護教論であり、全22巻、412年から426年まで15年かけて執筆された。

アウグスティヌスが『神の国』を執筆している間にも、蛮族侵入は北アフリカにも及び、南スペインにいたヴァンダル族が海を渡ってアフリカに侵入し、430年には遂にヒッポも包囲された。アウグスティヌスはその最中に76歳で死んだ。遺体は北イタリアのパヴィアのサン・ピエトロ教会に運ばれ、現在もそこにある。西ローマ帝国が滅亡するのは476年である。

## 2. 2 『神の国』と悲観主義的国家観

『神の国』は15年の歳月をかけて書かれた膨大なキリスト教護教論であり、前半は異教と異教文化批判を扱い（第1巻～第10巻）、後半は創造から終末に至るキリスト教歴史神学を扱っている（第11巻～第22巻）。前半はギリシア・ローマを中心に異教の多神教世界が「神の国」を知らない悲惨で墮落した「地の国」であることが論じられる。後半は歴史が「神の国 *civitas Dei*」（神・天使に従う善人の集団。神に対する愛が支配）と「地の国 *civitas terrena*」（悪魔に従う悪人の集団。自己愛が支配）の闘争の歴史であり、創造に続いて、墮天使と人間の神に対する反逆に始まり、最終的に最後の審判で「神の国」が勝利するまでの歴史神学が論じられる。

このように、『神の国』はキリスト教歴史神学を扱った神学の著作であって、政治の著作ではない。しかし、政治思想も異教と異教文化批判という形で展開されており、アウグスティヌスはキリスト教がローマ帝国によって国教とされた時代の思想家だが、まだキリスト教の悲観主義的国家観の伝統に立って展開されている。アウグスティヌ

スにとって国家とはローマ帝国のことであり、ローマの政治思想とはキケロの『国家論』のことであり、キケロ『国家論』批判という形で、キリスト教の政治思想を展開した。

キケロ（紀元前106-43年）はローマ共和政期最後の思想家で、ローマ最大の思想家である。『国家論』はプラトンとアリストテレスをローマに焼き直した著作であり、ローマ共和政が理想的な最善政体の混合政体（王政・貴族政・民主政の混合政体）であることを共和政期最大の軍人・政治家スキピオ・アフリカーヌスに語らせた著作である。この著作はこれ以後失われ、19世紀に再発見されるまで主にアウグスティヌスの紹介によってのみ知られ、今日でも不完全な著作である。

アウグスティヌスはキケロ『国家論』の国家の定義を紹介し、ローマ国家を激しく批判する。キケロによれば、国家とは国民の集合体のことだが、単なる集合体ではなく、法（jus）についての同意と利益の共有によって結合した集合体である。アウグスティヌスは直ちに「法」という概念を問題にする。キケロも法を正義・理性・自然法と一体のものと理解しているように、法は正義なしにはありえない。強大な軍事力で征服と破壊を繰り返し、異教と異教の退廃文化を助長してきたローマが正義を実現したことなど歴史上一度もなく、ローマがキケロの言う国家であったことなど一度もないと激しく批判した（第2巻21章、第19巻21、24章）。

アウグスティヌスは更に一般化して、国家は盗賊団と同じ武装集団にすぎないと激しく批判した（第4巻4章）。盗賊団も仲間同志の掟と利益の共有によって結合した集合体であり、国家とは規模が異なるだけで、同じ武装集団にすぎないと批判した。アレクサンドロス大王に捕らえられた海賊の親分は、大王からお前はどのような了見で海を荒らしまわるとか詰問されると、次のように返答した。「あなたが世界中を荒らしまわると同じ了見です。私は小さな船団でやっているのだから海賊と呼ばれていますが、あなたは大きな船団でやっているのだから皇帝と呼ばれているのです」と。

アウグスティヌスは以上のように、キリスト教の悲観主義的国家観の伝統に立って政治思想を展開し、正義が実現するのは「神の国」においてだけであり、「地の国」には正義の実現などありえないと断固拒否した。

### 3. ヨーロッパ：ローマ・カトリック教世界、 成立から13世紀まで

ゲルマン諸民族の民族大移動の第1波の大波が終り、ローマ・カトリック教の布教活動が活発となり、ゲルマン諸民族がフランク王国の王クローヴィスの改宗（496年頃）以来ローマ・カトリック教に改宗してゆくなかで、ローマ・カトリック教世界としてのヨーロッパがはっきりと姿を現わすのは800年である。この年にヨーロッパの中央部を占めるフランク王国のカル大帝（在位768-814年）がローマ教皇レオ3世によってローマで皇帝に戴冠した。これはローマ教皇がカルに諮らずに仕組んだ、教皇主導によるローマ帝国の再興であり、教皇は何の権限もないこの行為を正当化するために偽書「コンスタンティヌス大帝の寄進状」（コンスタンティヌス大帝がキリスト教に改宗する際に、宗教的至上権と世俗的統治権をローマ教皇シルヴェステル1世に寄進したとする偽書）を作って、正当化した。帝国理念はカルの死後一旦消えるが、962年にドイツ王オットー大帝（在位936-73年）が教皇ヨハネス12世によってローマで皇帝に戴冠することによって再興し、神聖ローマ帝国として継続することになる。このキリスト教帝国理念は東ローマ帝国（ビザンティン帝国）とギリシア正教を含まず、現実にはヨーロッパとローマ・カトリック教、それもその一部を支配しているにすぎなかったが、理念的にはヨーロッパは1つのキリスト教帝国・キリスト教普遍国家であり、2つの頭（教皇と皇帝）をもつ1つの体だと考えられた。

ヨーロッパ・カトリック世界は10世紀末までにほぼ今日と同じ姿を現わす。ゲルマン諸民族の民族大移動の第2波の小波も終り、イギリス・北欧はカトリック化し、東欧ではポーランド、ボヘミ



ア、マジヤール人のハンガリーがカトリック化し、唯一の例外は8世紀にイスラムの支配下に入ったスペインだけであった。

そして、ヨーロッパ・カトリック世界は11世紀から急速な発展期に入り、13世紀に頂点を迎える。農村は気候の温暖化のなかで大開墾・三圃制・水車と鉄製品・牧畜の普及によって急速に発展し、それに対応して都市が急速に発展し、中央にはロマネスク様式、13世紀からはゴシック様式の教会と塔をもち、周りを城壁で囲み、遠くから見ても文明を誇示した。封建制が確立し、華やかな騎士道文化が生まれ、封建王政は13世紀からフランス、イギリスを先頭に王権の周りに君主国家を形成してゆく（シチリアは1282年の晩禱事件によって潰えた）。イタリアの諸都市も富と権力を集中し、都市国家を形成してゆく。

ヨーロッパ・カトリック世界は発展期に入るや、ただちにイスラム世界に対する反撃に出、レコンキスタ（国土再征服運動）と十字軍に打って出た。ヨーロッパ世界は唯一神文明であり、攻撃性を最大の特徴とする。イスラム世界はムハンマドによって7世紀に創始されるや急速に発展・拡大し、8世紀には北アフリカからスペインを支配し、11世紀にはパレスティナを支配し、ビザンティン帝国に迫っていた。南イタリアのシチリアにもビザンティン帝国のギリシア人とイスラム教徒のアラブ人がいた。レコンキスタは1085年にトレドを奪い返し、13世紀までにグラナダ周辺にまで追い詰めた。後にここから更に新世界に向かうことになる。十字軍の方はエルサレムの聖地巡礼が妨げられたこととビザンティン皇帝の援助要請に答えて、ローマ教皇主導の下に行われ、1096年に始まる第1回十字軍以来、1270年の第7回十字軍まで実に200年間も続くことになる。

レコンキスタと十字軍はヨーロッパに2つの重要な成果をもたらした。1つはヴェネツィアとジェノヴァの地中海貿易航路の確立であり、莫大な富をヨーロッパにもたらすことになる。もう1つは12世紀ルネサンスであり、スペインのトレドとシチリアのパレルモを拠点に、古代ギリシア・

アラブの自然科学書とアリストテレスを中心にした、アラビア語やギリシア語からの大翻訳運動であり、知的革命をヨーロッパにもたらすことになる。

ヨーロッパ・カトリック世界は豊かになると異端の問題に直面し、12世紀半ばから危機的様相をおび、徹底的に弾圧することになる。教会を震撼させた最初で最大の異端はカタリ派である（フランスではアルビ派と呼ばれる）。カタリ派(cathari)という呼び名はドイツ語の猫(Kater, Katze)に由来し、猫の姿をした悪魔を崇拝する異端という意味である。カタリ派はブルガリアのボゴミル派が十字軍によってヨーロッパにもたらされたもので、12世紀末から13世紀初めにイタリア北・中部と南西フランスに広まった。カタリ派は善悪二元論の異端で、絶対的清貧の完徳者の魅力から多くの者を引き付けた。

南西フランスにおけるカタリ派＝アルビ派異端に対する戦いのなかで設立されるのが、絶対的清貧の托鉢修道会のドミニコ会である。1215年にスペイン人のドミニコによって設立され、異端弾圧・布教活動に専念し、都市を中心に急速に広まり、多くの大学の神学講座を占め、アキナス以下多くの著名な学者を輩出する。

カタリ派に続いて、すぐにワルド派という強大な異端も広まり、ローマ教皇は異端審問所を設立し、ドミニコ会とフランシスコ会という2大托鉢修道会がそれにあたり、徹底的に弾圧することになる。

ヨーロッパで学校が広まるのも12世紀ルネサンスからである。学校は聖職者養成が目的で、修道院や司教座聖堂の附属学校で、一般にラテン語学校とか文法学校と呼ばれる。学校では自由学芸7科、つまり人文学3科（文法、修辞学、弁証法〔後に論理学〕）と自然科学4科（幾何学、算数、天文学、音楽）が教えられた。勿論学校の実態は様々で、ラテン語文法の初歩と聖歌・聖務日課を専ら暗誦させるだけの学校から神学・教会法まで教える学校まで様々であった。

（旭川校教授）